

入賞作品発表

平成26年度読書週間行事「TOKUDAI川柳」表彰作品選考にあたって

徳島大学附属図書館川柳選考委員会委員長(総合科学部教授) 石川 榮 作

昨年度に引き続いて、今年度も「TOKUDAI川柳」を「本のある風景」というテーマで募集したところ、昨年度を上回る65点の応募があり、8人の審査委員により評価し、総合点の高い順に、同点者がいる場合には8人の審査委員で相談のうえ、上記のとおり表彰者を選考しました。

応募作品は昨年度に劣らずいずれも傑作揃いで、とりわけ優秀と入選の差は紙一重といったところですが、表彰者の作品について簡単にコメントしておきます。このコメントを参考にして次回も多くの傑作をお寄せいただければと思います。

まず最優秀賞には、多くの審査員の高い評価を得て、「**さあ読もう! 決心した日 返却日**」が選考されました。川柳は五・七・五の三句から成り、こっけい・風刺を主とした詩であること、そして今回のテーマが「本のある風景」であるという観点から評価すると、この作品がやはり今回のテーマに一番ぴったりの川柳であると評価されます。「さあ読もうと思って、読み始めたら、その日が返却日であった」あるいは「今日が返却日だから、今日のうちに読んでしまわなくては」という読書体験をした人が大勢いることと思います。何事も締め切りがあるからこそ、そのことができるのかも知れません。個人的体験が客観化されているところが高く評価されます。

次に高く評価されるのは、優秀賞の「**寝るまえに 読んだ景色が 夢のなか**」です。布団に寝ころがって読書をしていると、そのまま寝てしまうことは誰もが経験すること、それはこっけいなユーモラスなことでもあります。その本の中の景色が夢の中で展開されることも多いかと思えます。読書に「夢中」になると、「赤毛のアン」の花子のように、「想像」の翼を広げて、夢の中で自らの夢物語を「創出」していくこともできます。引き締まった五・七・五の言葉の中に、読書するというすばらしい人生体験の「夢」もまた盛り込まれていると思われるところが高く評価されます。

同じ優秀賞の「**めくるめく 学問の森 めくるたび**」は、同じ言葉を繰り返し使って、川柳独特のリズム感のある作品に仕上がっているところが高く評価されます。本を捲(めくる)度(たび)は、読書を介して「巡る旅」でもあり、図書館を「学問の森」と表現しているところすばらしいと思います。豊饒(ほうじょう)な読書の森を巡る旅を大いに楽しんで、「めくるめく」ときめきを体感していただきたいものです。

もう一つ同じ優秀賞の「**買ったまま 読まずにまた買い 山造る**」には、こっけい・風刺が込められていて、これもすばらしいと思います。ただ「山造る」は「山となる」と表現した方がよかったのかもしれない。誰もが体験したことのあることが客観化されているところが高く評価されます。

入選は5名の予定でしたが、甲乙つけがたく同点も多かつたことから、最終的には8点を選考しました。

まず「**喋らない それでも君は 友達だ**」は、喋らないでも自分に喜怒哀楽を語ってくれる本を友達だと表現していますが、「本のある風景」がテーマですから、「君」は「本」と表現したのもつよかったのかもしれない。

「**閲覧室 本を手に手に 潜る海**」は、図書館で各人が読書に没頭している「本のある風景」を詠んだもので、「潜る海」が少し気になるものの、今回のテーマにふさわしい作品です。

「**あの人が 読んだ本を 手に取って**」は、気になる人が読んでいた本が気になって手に取ってみるという体験は、誰もが体験することだと思います。こういう動機からする読書も、特に若い頃には貴重なことだと思います。

「**積み上げて うっかり崩して また読んで**」もまた、読書家なら誰もが体験することです。崩れて片付ける途中、再読してふと新しいものに出会うことはよくあるものです。このような調子だからいつまで経っても後片付けができないのが、本当の読書体験というものです。

「**バスの席 酔ってもページ 繰りたくて**」は、読書に夢中になっている風景が目には浮かんできます。不思議なもので、勉強部屋よりも乗り物の中の方が格好の読書の場となります。

「**読みふける 話はつづく 夢の中**」は、上記の優秀賞と同じ風景を読んだものですが、それと比べると、「読みふける」と「夢の中」の繋がりが少し弱いような気がします。

「**山積みの 本に苦学の 轍あり**」は、まず「轍(わだち)にふりがなを付けておいた方がよかったのかもしれない。「轍(わだち)とは「車」が通って道に残した車輪の跡」のことであり、この川柳は本のあちこちに付けられた「付箋」や書き込みの跡が苦学の様子を語ってくれます。明らかに「本のある風景」です。

最後の「**我が棚に 黄色味帯びた 祖父の辞書**」は、祖父の辞書が自分の本棚にあって、祖父から読書の伝統を受け継いでいるところはほほ笑ましい「本のある風景」です。昔の人はパソコンもスマホもない時代、勉学・読書に熱中するしかなかったと推察されます。情報化時代の現在、パソコンもスマホもたいへん便利で、役に立ちますが、しかし、それらから得られる「情報」あるいは「知識」は、真の意味での「教養」ではありません。やはり直接書物を手にとって、じっくりと読書することの中から本物の教養を身につけていただきたいものです。

以上のほかにも傑作はまだありました。入選枠にも限りがあるため、惜しくも漏れてしまった応募者には申し訳ございません。また次の機会に応募していただければと思います。川柳を介して、読書にもより強い関心を持って、読書に専念することで、より充実した学生生活を送られることを期待しています。

最優秀賞 さあ読もう! 決心した日 返却日
栄養生命科学教育部 中尾真理

優秀賞 寝るまえに 読んだ景色が 夢のなか
総合科学教育部 出口桜子
めくるめく 学問の森 めくるたび
医学部医学科 林 篤志
買ったまま 読まずにまた買い 山造る
薬学部 山口裕大

入 選 喋らない それでも君は 友達だ
総合科学教育部 山川英理

閲覧室 本を手に手に 潜る海
歯学部歯学科 児玉彩子
あの人が 読んだ本を 手に取って
医学部栄養学科 南 琴乃
積み上げて うっかり崩して また読んで
総合科学部人間文化学科 野田明輝
バスの席 酔ってもページ 繰りたくて
歯学部歯学科 高橋理久
読みふける 話はつづく 夢の中
医学部医学科 夏井純平
山積みの 本に苦学の 轍あり
総合科学部社会創生学科 北尾彩夏
我が棚に 黄色味帯びた 祖父の辞書
医学部保健学科 三原由樹

